

<書評>

安里和晃編  
『国際移動と親密圏——ケア・結婚・セックス』  
京都大学学術出版会、2018年

平野恵子（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）

グローバリゼーションの進展によって、移民排斥運動に象徴される越境する人々に対しての防衛的ナショナリズムの高まりに注目が集まっている。その一方で、外国人労働者の増大が「静かに」進むのが、本書で扱う家事・介護労働、あるいは性労働といった、再生産労働すなわち「親密圏における労働＝ケア」（本書 p.2、以下ページ数のみ記載）を提供する職種群である。編者が「静かな増大」（301）と表すのは、これらの職種が親密圏で展開され、国内労働市場と競合しないように国家（これには受入れ国のみならず送出国の裁量も含まれる）によって賃金水準を低く設定され、積極的な権利保障がなされないまま、すなわち労働者の脆弱性が保たれたまま受け入れ（送出し）が続けられることで、移住者は交渉力を持たず、ゆえに彼らの存在自体が不可視化されながら、その数が増え続けているからである。

9本の論文と、編者による「はじめに」と「あとがき」からなる本書は、こうした「親密性の労働＝ケア」（7）とそれが引き起こす国際的な分業体制について、理論、東アジアにおける現状、そして脆弱性克服への挑戦という3つの側面から多角的に検討している。

それでは以下、本書の概要を紹介していこう。

三部構成の第1部理論編では、親密性の労働に従事する人々の脆弱性がいかに構築されているか、またその克服への方策が論じられている。

第1章では、編者によって概念整理と各章のマッピングがなされる。編者によれば、親密性の労働とは、「社会的交換関係に基づく関係が目的化された営為であり、家事・育児・介護・性などのケアが想定されるもので（16）、社会的な交換から経済的なそれにいたるまで、例えば贈与や交換、社会保険等の再分配、市場を通じた労働者の派遣にいたるまで、グラデーションのように配置することが可能な親密性の労働の性質が浮かび上がる。経済成長著しいアジアでは、これらが早くから外部化され国際商品化されてきた。外部化には、商品化という市場化の側面と、それを受容するための規範的側面があるが、家族ケア規範が強いとされるアジアにおいては、女性の労働市場への進出とその所得による親孝行がクローズアップされ、正統性の根拠とされてきた。また、外部化にはケアの社会化、すなわち脱商品化、脱家族化の側面もある。ほかにも、農村への余剰労働力に押し付けるような、原初的な形態とも呼べる場合も想定できるであろう。以上の点を念頭に置きながら、各章の着目点を福祉レジームと移民レジームの交差からマッピングし、本書の見取り図を示すのが本章である。

次に在日国際結婚女性、なかでもフィリピン人女性のシティズンシップを理論的に考察する章が続く。第2章では、人種、ジェンダー、階層によって彼女らのシティズンシップが日本人男性との婚姻もしくは性的関係によって構成されていること、また彼女らのエイジェンシーは構造的な制約のもとで発揮されるもので、その男性との婚姻関係が継続されているか否かというシティズンシップに伴う包摂、排除・周縁化のメカニズムが、ある女性の地位を上昇させる一方で、他の女性たちの周縁化にもなりうることを明らかにしている。

第3章は、日本において性風俗産業で働く非正規滞在の女性たちが「不法滞在者」とされることを、制度が生み出す社会的排除の問題と捉え、批判的に考察している。日本の人身取引とは、対策行動計画に沿った一連の取り締まりが彼女たちの存在や社会の低位置からの脱出を試みる実践であるところの「偽装結婚」に対し、敢えて「不法性」を押し付けるといふ、グローバル社会における制度的な排除であることが指摘される。

第2部は、韓国、台湾、日本、マレーシアの事例を取り上げ、親密性の労働の担い手に関する国別の課題を示している。

韓国におけるケアワークの社会化の問題を、老人長期療養保険を事例に扱うのが第4章で、韓国におけるケアの社会化は、第一に女性の労働力の観点から、第二に「ケアの脱家族化」(103)の観点から同国で議論となっている。上記保険制度の導入は、脱家族化についてはある程度の効果をもたらしたケアの社会化に寄与するものの、この制度は過度に市場志向であったがゆえ、高齢者ケア施設は供給過剰となり、サービスの質やケアワーカーである療養保護士の労働条件を低下させるという、ケア労働の再家族化が惹起されてしまう。

続く第5章は台湾におけるケアの不足に関して、外国人労働者や国際結婚移民を担い手とするケアワーカーとの関連から考察している。ケア不足への対処は階層によって異なり、高所得階層は選択肢を多く持つ一方で、低所得層は無償で家族が担うか、移民の妻があらゆるケアに対応することとなる。ここにおいて、国際結婚とは次世代再生産のみならず、ケア全般を担う制度であることは明らかである。しかし「親孝行の娘」としての役割を果たすべく母国に仕送りをしたい移民女性と、家庭内のケア全般を担わせたい夫家族とのニーズに一致がみられない場合、ケア不足の問題は再度議論の中心となる。

第6章は、日本における新たな移住者としての結婚移民の子(JFC: Japanese-Filipino Children)とその母親を事例に、エンターテイナーであった母親とその子たちが移住する過程で直面する問題を解説し、来日後、再び介護職として親密性の労働に構造的に取り込まれる様態を考察している。筆者の長年にわたる調査から明らかとなるのは、JFCやその母親は、シティズンシップを有し在留資格があるにもかかわらず、移住する過程で債務奴隷化していく様である。そのような状態でありながらも、フィリピン本国家族との家族紐帯保持のために、彼女らには「親密性の期待」(184)が寄せられており、ここでの紐帯とは、本国への送金圧力によって保持されるものであることがわかる。

第2部の最後を飾るのは、マレーシア国内移動を扱う第7章で、非都市部に居住する親族、特に母方親族との密接な関係を維持することで子の養育と賃労働を両立させる華人女性の戦略を、聞き取り調査から明らかにしている。移住労働者となる余剰人口を生みだす農村は、都市部で就労する娘や姉・妹の子の養育を引き受けているのである。

第3部「脆弱性の克服」と題されるパートにおいて、第8章は就労先のシンガポールにおいて移住家事労働者が構築する親密圏の有り様を筆者のインタビューや参与観察により明らかにしている。本章の議論は、彼女たちの出身国での関係性(夫、子供)の保持が良いものと仮定し、国際移動は親密圏を崩壊させる制度と捉える「ケア・ドレイン」(220)仮説に対抗するもので、性的関係も含めた就労国における生活世界とそこにとどまる意味を移住労働者の側から描いており、興味深い。

最終章第9章は、移住家事労働者が抱える脆弱性の克服を検討するにあたり、「上からのフォーマルな地域主義」(290)への対抗的な公共圏としての東アジアにおける市民社会アクターに焦点を当てている。ここで取り上げられる労働組合とNGOとの国境を越えた連帯は、支配的なヘゲモニーへの有力な「地域主義」となりうることを本章の事例は示唆しているといえよう。

本書が評価されるべき点は多々あり、親密性の労働をめぐる複雑な状況下で「研究者が出来るのは、ローカル・ナレッジを重視し、彼女たちの実践の意味を複合差別解消の点から捉え、安全に行えるよう支援することであり、その方向での議論こそが彼女たちを正当な一員として処遇することにつながる」との第3章筆者青山の指摘は、示唆に富んでいる。本書執筆者の多くが移住労働者と社会活動を通じて関りを有しているというが、こうした編者らの関わり方が、単なる課題の指摘にとどまることなく、移住労働者の脆弱性の克服に向けての理論構築や現状分析をおこなう本書の姿勢につながっているのだろう。

このように興味深い論点が多く提示されている本書であるが、読了後、以下の二点が気になった。第一に親密性の労働の外部化の歴史性についてはどのようなことが言えるのだろうか。例えば香港においては親密圏内部で完結しないケアの提供は「移動の女性化」がみられる以前から展開されており、各章における議論とどのように接続可能なのか考えてみたい。第二に親密性の労働概念に関して、血縁関係に従属するとされる再生産労働よりも広義の解釈が可能とあるが、再生産領域を広くとらえる議論は既に多く有り、これとの関係性をどうとらえればよいのか。ただこれは本書のみから得られるものではなく、読者の側が本シリーズ「変容する親密圏／公共圏」の第1巻2巻との議論で検討すべき課題なのであろう。

編者の論にあるように、親密性の労働の外部化は現在のところ、移動する人々の脆弱性の上に成立している。その克服のためにはどのような在り方がよしとされるのか、本書はその在り方を検討するための材料を多く提供する貴重な作品である。